第Ⅳ部門　　新しいまちづくりのための地域独自性に関する分析的研究

関西大学工学部　学生員　○坪内　博　　関西大学工学部　正会員　吉川　和広
㈱地域計画建築研究所　正会員　杉原　五郎　　関西大学大学院　学生員　小関　耕司

1.はじめに　従来の都市計画においては機能整備を優先する計画理論が中心であり、都市の利便性・効率化を追求すればするほど、どこの都市も同じような性格・姿となり都市の個性が薄れる結果となった。しかし近年の社会経済の急速な変化によって住民の都市に対する価値観も変化し多様化してきた。その結果、その地に住みあるいは働くことを誇りにできる都市の個性や都市の魅力の形成が不可欠となってきている。

本研究では、人々の地域に対するイメージはなによって構成され、どのような構造をしているのかを明確にし、“まち”の個性をより明確にするにはどのようにすればいいかを提案することを目的とする。

2.地域イメージと地域アイデンティティー　イメージは、「ある事象に対して持つ人間の概念・判断・態度をもたらす総体」とされている。人々が地域を評価する場合、当該地域に対する自分なりのイメージを抱き、これに基づき評価するため、イメージが重要な概念となる。すなわち、「人々が頭の中に思い描く地域の姿」であり、「地域に対する評価」でもある。

アイデンティティとは一般的に、自己同一性、自我同一性、主体性等と訳される。住民は地域アイデンティティを用いて当該地域の個性（独自性）を明確に認識し、地域の「うち」と「そと」を区別する。地域アイデンティティ確立のためには、まず最初に地域に対する共通な自己イメージの形成、すなわち共有できるイメージの生成が必要となってくる。この地域アイデンティティを形成できれば、まちに対する住民の意識が同じ方向を向くことになり協調性が生まれ、自分たちのまちに愛着、誇りがもたれる。よって地域アイデンティティの形成がまちづくりにおいて重要となるのである。

3.研究手法と分析　本研究では新しいまちづくりという観点から、今後の都市のあり方を提示し、先導する実験的な都市いわゆるパイロット・モデル都市の実現を目指し、都市づくり面で現代の都市が直面する諸問題の解決に貢献していく関西学術研究都市の中心地である精華町を研究対象地とし、住民が持つイメージを自分たちが住むまちと、まちを構成する事物に対する２つに分けイメージ及びその構造を把握するためにアンケートにより調査を行った。

(1)名詞連想による調査

まちのイメージに関連が深いと思われる普通名詞・固有名詞を選んだ回答者の全回答者に対する割合をイメージ連想率と定義し(1)に示す。

$$\text{イメージ連想率}(\%)=\frac{\text{ある名詞を連想した回答者の数(人)}}{\text{アンケート回答者総数(人)}}\times 100 \quad (1)$$

普通名詞は地域が異なっても地域イメージを表せるものとした。固有名詞は精華町固有の事物を表すものであり、まちのイメージに関係が深いと考えられるもの抽出して用いることとした。調査結果（上位10位迄）を表１に示す。

表1　イメージ連想率結果

順位	普通名詞	(%)	(人)	順位	固有名詞	(%)	(人)
1位	研究施設	60.9	263	1位	けいはんなプラザ	56.0	242
2位	田んぼ	60.0	259	2位	光台	30.6	132
3位	ニュータウン	46.1	199	3位	木津川	29.6	128
4位	川	23.8	103	4位	京都ＦＣ	27.3	118
5位	山	21.3	92	5位	けいはんな記念公園	22.9	99
6位	自衛隊	15.5	67	6位	民間研究所	19.2	83
7位	通信・情報施設	13.2	57	6位	ATR	19.2	83
8位	住宅地	10.9	47	6位	川西観光いちご園	19.2	83
9位	空	8.8	38	9位	陸上自衛隊博覧支部	16.7	72
10位	公園	5.8	25	10位	近鉄京都線	16.0	69

普通名詞では上位に、関西学術研究都市開発（以下、学研開発）によりイメージされたであろう研究施設・ニュータウ

Hiroshi TSUBOUCHI,Kazuhiro YOSHIKAWA,Goro SUGIHARA,Kouji OZEKI

ン、学研開発以前からの田圃・川・山などの新しさが感じられる普通名詞と、自然が感じられる普通名詞が強くイメージされていることがわかった。固有名詞では学研開発による「けいはんなプラザ」、「光台」、「けいはんな記念公園」学研開発以前からの「木津川」、「京都フラワーセンター（京都 FC）」などの事物が上位を占めており連想率が高いことがうかがえる。ここでも新しさが感じられる名詞と自然が感じられる名詞が強くイメージされていた。

(2)形容詞対を用いた SD 法調査

本研究ではまちをイメージするうえで適していると思われる形容詞対を 14 対に絞り SD 法調査を行ない、その結果をプロフィル曲線に示した(図 1)。ここで、精華町では「のどかな」、「自然な」といったゆとりが感じられるイメージが強かった。逆に「けいはんなプラザ」、「光台」では「モダンな」、「お洒落な」といった先進的なイメージが強く現れていることがわかった。

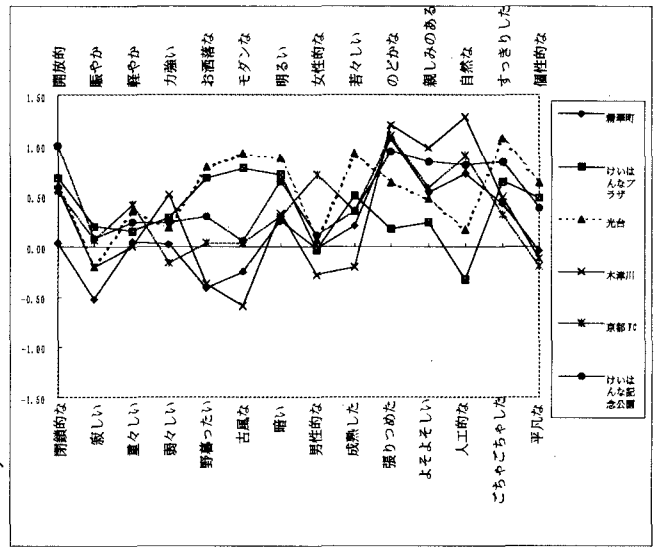

図1　イメージプロフィール曲線

(3)因子分析

SD 法で用いた精華町を表す形容詞対の因子分析を行った。因子分析は多数の測定項目からなるデータの次元を縮小する方法であり、14 個の形容詞対を主要な因子で表現しようと試みるものである。これにより第 1 因子を「現代的イメージ」、第 2 因子を「田園的イメージ」と解釈できるの 2 因子を抽出した。

4.結果の考察　イメージ調査の分析結果から名詞によるイメージ連想率からは普通名詞、固有名詞ともに学研開発による現代的事物を表すものと、学研開発以前からの自然を表す事物が強くイメージされていた。また、精華町をイメージする形容詞対を因子分析したところ精華町のイメージは大きく「現代的イメージ」、「田園的イメージ」に集約することができた。これらの結果は、精華町は田畑の多い自然豊かな地域であったところに学研都市開発によってそれまでになっか近代的な事物が多く存在するようになってきたからだと考えられる。このことをふまえて、形容詞対を用いた SD 法の結果より描かれたプロフィール曲線をみてみると学研開発による事物が持つイメージはモダンで明るくお洒落であり、既存事物が持つイメージはのどかで親しみがあり自然が感じられるものであった。

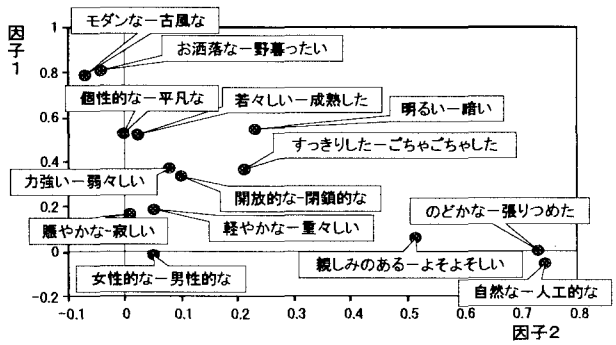

図2　形容詞対因子負荷量

5.おわりに　本研究では精華町のイメージには「現代的イメージ」と「田園的イメージ」が存在しているということが明らかになった。これらは多くの住民に認識されているものであり、精華町のアイデンティティとなり得るものであるとみることができる。また、これら 2 つのイメージが融合していることが精華町の独自性であると推定できた。今後のまちづくりにおいてはこの独自性をより明確なものにしていくため、自然との融合に十分配慮して、近代的な学研施設の整備を進めていくことが重要であると考える。